

## 研究会報告

足立明氏追悼シンポジウム（京都大学）記録

## アスベスト問題の転換点 クボタショックの経験

片岡 明彦

関西労働者安全センター

## 労災職業病N G Oに就職

どうもこんにちは、片岡でございます。私は京都大学に1977年に入学しまして、大学院を中退したのが1985年の3月で、学科は熊谷信二さんと同じ京都大学工学部衛生工学科。私が入ったときには熊谷さんはすでに大学にはおられませんでした。

わたくしは1985年の4月に関西労働者安全センターというところに、そこにしか行くところがなかったので就職しまして、今まで主に、労災職業病の被災労働者の方や家族の支援をしてきました。

今日の話は、いわゆるクボタショックを契機とする石綿＝アスベストの問題の社会問題化に関してです。

今は、例えば中皮腫という病気がアスベストで起こるということは、大概の人は知っているのではないのかなということになりましたけれども、今日お話しする「クボタショック」と呼ばれる現象の前までは、マスコミ関係者を含め、あまりご存じない状態でした。それが一挙に社会問題化と言いますか、一般化する契機となったクボタショックを当事者として経験いたしましたので、そのことをお話いたします。ですので、熊谷さんのように起承転結のある話ではございませんので、そのへんはお断り申し上げます。

## 石綿と石綿関連疾患

石綿、つまりアスベストは蛇、紋石系の石綿と角閃石系の石綿に分かれます（図1）。蛇紋石系は白、角閃石系は青とこちらの茶色い石綿、つまり、白、青、茶。この3つが主な石綿です。

石綿は発がん性が明白です。肺がんと中皮腫という石綿に非常に特異的な腫瘍を起こします。特徴的なのは中皮腫で、白石綿の中皮腫のリスクが1とすると、茶石綿は100、青石綿が500という説があるくらい、この角閃石系の石綿は中皮腫のリスクが高いとされています。肺がんについては、これほどの差はないと言われています。

それで、これは石綿の原石です（図略）。これはたぶん蛇紋岩だと思いますけれども、こういう白い筋になって石綿が入っている。

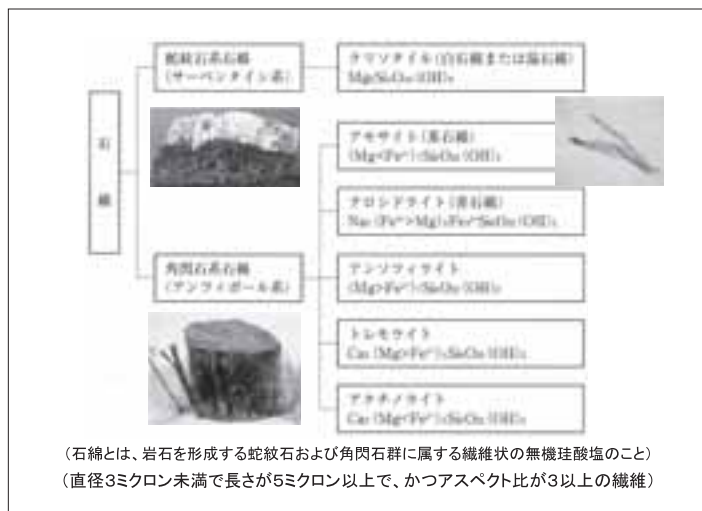


図 1

この a のマークはだいたいアスベスト含有製品のマークです。こういう繊維状の物質です。

こちらの図は、日本にもかつて石綿の鉱山がたくさんあったことを示しています (図2)。だいたい蛇紋岩の産地にそって、非常に小さな鉱山が点在しています。これは戦時中、日本に外国から石綿が入らなくなってしまい、軍艦に使う石綿も不足するということで、品質は悪くても、とにかく石綿を掘り出せといろんなところを掘ったことを示す、かつての日本における石綿鉱山を示しています。

石綿による健康障害です (図3)。まず、石綿によるじん肺＝石綿肺があります。それから肺ガン。そして、中皮腫。この病気は、中皮という組織にできるガンで、予後が非常に悪い。加えて、石綿を吸い込んだ場合、胸膜が炎症を



図 2 アスベスト鉱山及び産地分布図

出典：工業技術院 日本鉱産誌 B IV 巻「物理的特性を利用する鉱物」

繰り返して胸水がたまる良性石綿胸水、それを繰り返して胸膜が肥厚して呼吸機能障害をもたらすびまん性胸膜肥厚。

良性の疾患として、特殊な癥痕状のものが胸膜にできる胸膜肥厚斑（胸膜プラーク）というのがあります。胸膜プラークは石灰化して、レントゲン画像上、白く明瞭に見えることがあります。

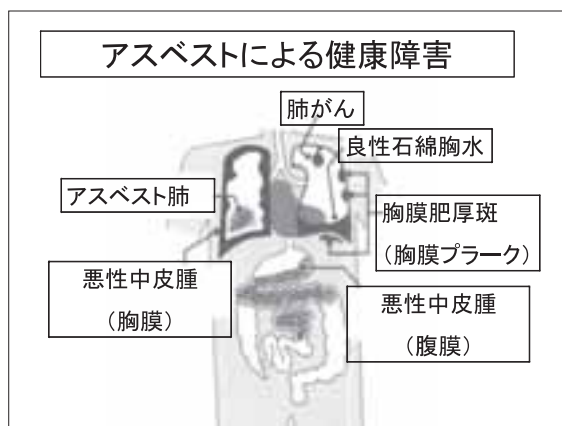


図 3

### 激増した労災認定件数

クボタショックというものを端的に示しているのがこのグラフです（図4、5）。

中皮腫は、石綿に特異的なガン、つまり、石綿でしかまず起こらないと考えられているガンで、ガンの中では少ない。肺ガンは、お医者さんに行くと、「たばこを吸ってます。」「たばこを吸ってる。それですね」となるんですけれども、中皮腫だというと「あなた、石綿をどこかで吸ってないですか」と言われるわけですね。そういうガンです。

その中皮腫の労災認定件数ですが、2002年、3年、4年と少しずつ増えて、2004年が、確か120件ぐらいですね。1995年なんてたぶん1桁です。非常に少ない件数でずっと来てたわけです。

それで、クボタショックです。

2005年がクボタショックの年です。後でお見せしますが、6月29日の夕刊で毎日新聞が特報したのが出発点なので、2005年の半ば以降でクボタショックが起きました。その時までにはあまり労災請求件数はなかったはずですが、そこから増えて、この年だけで500件ぐらいの労災認定件数がありました。

次の年はさらに、1000件ぐらい労災認定件数が跳ね上がりました。

つまり、労災認定件数が、まるで次元の違う話になってしまった。これがクボタショックということだったわけです。私は、先ほど申しましたように1985年から労災職業病の仕事をしてきましたが、こんな一つの疾患でこういう推移をたどるような事件に遭遇したことはありませんでした。よく似た話としては、過労死、つまり、過重な労働負荷による脳心臓疾患なのですが、1990年代から2000年代にかけて労災認定の運動的取り組みが進み、徐々に労災認定基準が緩和されながら、労災認定件数が増加しましたが、これほどの桁違いな増え方ではありませんでした。こういう結果をもたらしたのが、クボタショックの本質ということになります。また、石綿肺がんの方の労災認定件数も、同様に、クボタショック後にはね上がりました。

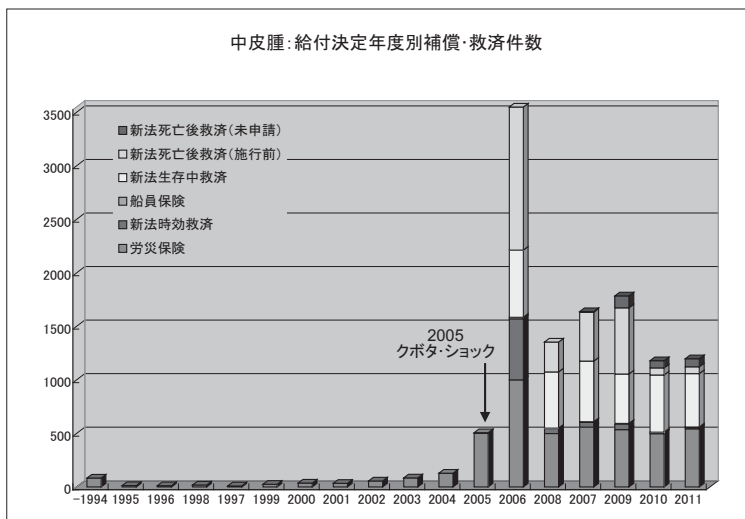


図 4

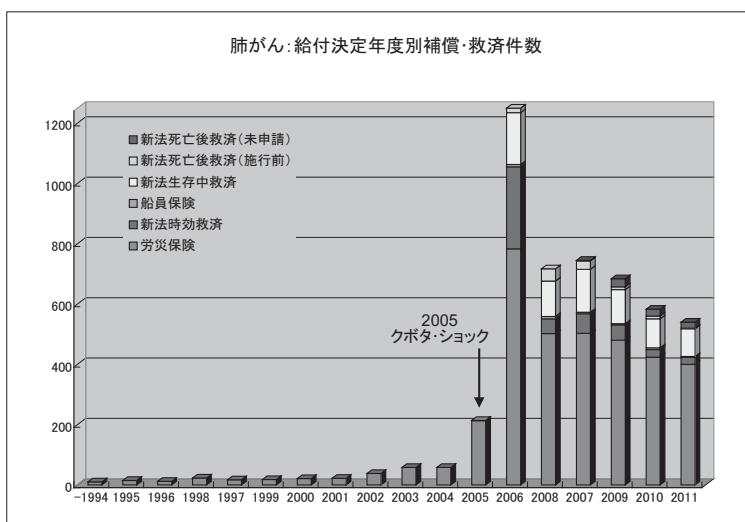


図 5

## ブラジルから東京へ

ところで、クボタショックそのものは2005年の6月からでしたが、クボタショックはそこに至る経緯がありました。

2004年11月に世界アスベスト会議東京大会が開かれました。石綿問題に取り組むNGOや被害者団体が一堂に会し、大きな成功を収めました。

東京大会の前の大会は、2000年のブラジル大会でした。もとをただせば、このブラジル大会に日本のアスベスト問題活動家が参加したことが、クボタショックへの起点になったのか

もしません。

その中の一人に中地重晴さんもおられました。そのとき4人ぐらいが行ったはずですが、たしか、ブラジルの土産にダイヤモンドを買ってきて、安かったと言って喜んでいたように記憶していますが、その程度のブラジル大会参加でした。ただ、半分観光旅行な感じで行きましたが、彼らが偉かったのは、帰国してのち、2004年に東京に世界アスベスト会議を誘致しようとしたことです。

それまでの日本の石綿に対する運動はいわば敗北の歴史なんです、これは。勝利か敗北の話で言えば、やはり、敗北であったと思います。石綿禁止の道筋をつけることができていなかった、石綿企業を打ち負かすことができてこなかったのです。

しかしそれでも石綿の問題を何とかしようといういろいろな人、団体が活動をしていました。

そんなとき、ブラジルに行き、世界のアスベスト禁止の運動の盛り上がりを目のあたりに見た彼らは相当ショックを受けました。このまま行くとますますだめになってしまう。そこで、2004年に東京に世界アスベスト会議を誘致するというのを、無謀(?)にも運動仲間

に提起したわけです。提起したときは、反対論もありました。そんな派手なことをやるのではなく、地道にやらなければならない、という話もありました。けれども、ここはもう敗北してきていますから、わたし個人は、やろうじゃないかという側につきました。

## 患者と家族の会スタート

東京大会をやろうと決めてから、2003年12月に、中皮腫・じん肺・アスベストセンターという石綿問題に専門に取り組む日本で初めての市民団体がスタートしました。アスベストセンターの名取所長と永倉事務局長はブラジル大会に参加しています。2004年2月には中皮腫・アスベスト疾患・患者と家族の会というアスベスト疾患の患者団体が産声を上げます。設立時の数少ない被害者遺族の中心がクボタショックの引き金を直接引いた古川和子さんでした(図6)。古川さんは今その患者と家族の会の会長をしています。そうするうちに、石綿肺がんや中皮腫の労災認定件数が少しずつではありますが、増えるようになりましたし、関心を示すメディアがわずかですが現れははじめました。NHKラジオが患者と家族の会のスタートを放送しました。

そして、2004年11月の東京大会は相当な成功を収めました。内外から本当にたくさんの人が来られて、メディア



図 6

も取材に来ました。ホットラインを3日間やったのですけれども、全国からたくさん相談が来まして、私も相談電話を受けました。全国各地から多くの電話がかかってきました。

その関係で中皮腫になった方のことを伝えたNHKラジオ番組がありました。

## ラジオからテレビへ

そのNHKラジオの放送をタクシーの中で聞いていたのがあるドキュメンタリー制作会社の社長でした。この人は慧眼な人で、「これはいける、これはひょっとしたら水俣病クラスの話かもしれない」と思ったそうです。その方が、女性の若いディレクターの野崎朋未さんに、「君、取材に行ってこい」と言って、当時、出来たばかりの患者と家族の会の関西のメンバーとして、私の事務所を拠点に一緒に活動するようになっていた古川和子さんに野崎さんが連絡をしてきました。

野崎さんは古川和子さんに、アスベストの病気の患者が集まっている病院はないですか、と聞いてこられました。それで、(そういう病院が)ありますと言うことで、教えたのが、兵庫医科大学だったんです。

そのドキュメンタリー制作会社は朝日放送(ABC)の下請でしたが、野崎さんはここに取材を申し込みました。そこには中皮腫の専門家である中野孝司という教授がいるんですけれども、中野教授はこの取材を受け入れました。野崎さんは、ドキュメンタリー制作のプロです。ドキュメンタリーは軸の人物を誰にするかが大事なそうです。患者と古川和子さんという二つの軸でドキュメンタリーを制作しよう、そして医学ですから、「先生、手術を撮らせてください」ということで紹介されたのが土井雅子さんでした。

## クボタ被害者見つける

土井さんは1947年の生まれで、当時まだ50歳そこそこでした。この方の手術シーンを野崎さんたちは撮影しました。土井さんは石綿職歴がありませんでしたので、何かしてあげることはないかと考えたそうです。野崎さんは、土井さんに相談先を紹介するのと自分の取材目的を兼ねて、古川さんを紹介しました。

土井さんは伊丹のタコ焼き屋のおばちゃんとして、生まれたときから、石綿を作ったり使ったりする仕事には無縁でした。当時、普通私たちが患者の支援活動するというのは、何とかこの人が労災認定される方法はないのか、という、そういう活動が主だったわけですね。しかし、土井さんを訪問して話をきいた古川さんは、土井さんがどこで石綿にばく露したのか、皆目わかりませんでした。

最後に残ったのが尼崎在住という居住歴くらいでした。

事務所で尼崎市の地図を広げて、土井さんが住んでいたあたりを古川さんといっしょにながめていたとき、クボタの阪神事業所が尼崎駅前に印されているのが目にとまりました。



クボタの労働者に石綿被害がけっこう出ているということは、私も仕事柄、ウワサでは聞いていましたので、ここにクボタがありますね、クボタは被害が出ていると聞いているけど、という感じで古川さんに話したとき、古川さんは「それなんじゃないか」と直感されて、ほどなく、周辺の聞き込み調査に出かけるようになりました。

## 中皮腫患者つぎつぎ

土井さんと同じような病気で亡くなった方はいないかを調べまわろうというわけです。

野崎さんとカメラマンがその調査に同行して撮影したのが、2004年の10月の終わり頃でした。

このとき古川さんは、こうやって町を歩くわけですね。これを撮っているときは、別に当てがなく撮ってるんですよ。この日、いい情報を得られないまま、トイレを借りに古川さんと野崎さんはあるガソリンスタンドに立ち寄りました。

野崎さんがトイレに行っている間、古川さんは、ガソリンスタンドの従業員の赤ちゃんに「この辺で、肺の病気で死んだ人とか、病気の人はいませんか」と尋ねたのです。そしたら、おっちゃんは「うちの社長でしょ」と言い、古川さんが「病気は？」と聞くと「肺癌」と言うわけですね。

ついに情報があつたと。それで何とか聞き出そうとするのですが、不審に思ったのかその男性従業員は、それ以上は教えてくれませんでした。

それでも、結局は見つけてしまうんです。

これがガソリンスタンドの女社長の前田恵子さんと言う方で、この方は、肺がんではなく、中皮腫でした。これ全部、ドキュメンタリーの取材と古川さんの突撃精神でこの人を見つけただけです。

土井さんは、確かにガソリンスタンドの近くに住んでいた。前田さんも、昭和30年前後からこのあたりに住んでいた。2人見つけるわけですね。これが2004年の10月下旬です。そうしていたら、この右側のこの人、早川さんという男性の方で、この方が近くでお酒屋さんをやっていました。この人も中皮腫でした。

さっき紹介したドキュメンタリーは2005年1月29日の深夜、テレメンタリーという、ほとんど誰も見ない時間帯のドキュメンタリー番組で放送されるわけです。それをたまたま早川さんの友達が見ていて、「お前と同じ病気のおばさんが映ったぞ」と。「前田のたばこ屋のおばさんなら知ってるわ」ということで、早川さんは前田さんのところに行くわけです。これで3人です。3人いれば、これは間違いのない話になるわけで、この頃から古川さんは興奮しまくって、「片岡さん！大変なことだよ！」って言われて、「ああ、そうねえ」と。それで、ただですね、その時はやっぱり偶然が重なりまして、この方は古嶋さんといいまして、このとき腹膜中皮腫でお腹が腹水が溜まってばんばんでした。腹膜中皮腫の末期でした。お亡くなりになるんですけれども、この方は実は尼崎のクボタの工場に昔、アスベストを運

んでいた日本通運の社員でした。

周辺の方はこのときまでに、3人見つけた。ところが、ご本尊のクボタの工場の中の被害者の方というのが全然会ったことがなかったのです。が、たまたま相談電話がかかってきて、この古嶋さんにクボタの工場の状況を直接聞くことができ、さらに間違いないということになって、その後、話は進んでいくのです。

これは古嶋さんが当時働いていた状況を説明されているところ。若い頃のコジマさんで、なかなかいい男ぶりです。古嶋さんに会ったのがもう2005年の2月ごろ。これが自宅に行ったときに取材を受けている様子で、これは先ほどの野崎さんが撮らせてくださいと言ったら、一生懸命昔の話してくれて、「もう全部撮ってくれ、俺の姿を全部撮ってくれ」と。お腹が腹水でふくれて、ひもで引っ張らないと起き上がれないんです。残念ながらクボタショックの前の4月にお亡くなりになって、それで解剖したら、ひどい状況だったといいます。

そういうことがあって、2004年の10月から2005年の3月頃にかけて、我々は疑いを強めていきました。

## クボタ、患者に会う

当時、大阪府立公衆衛生研究所にいた熊谷さんと、奈良医大の車谷典男先生に、こんなにたくさん中皮腫の人がいるから調べてもらいたい、と相談しました。2005年の1月のはじめです。

寒いなか、地元のある医療生協の事務所に集まってもらって、話をしたわけです。「3人います。これはやっぱりおかしいと思う。調べてください」と。熊谷さんたちは「3人しかいないのか」と、そう言われました。

それでも古川さんはあきらめませんで、とにかくクボタに話を通して、クボタに話を持って行きたいということで、尼崎の活動家を通して話をクボタに持って行ったわけです。はじめクボタ側は、工場の周りで中皮腫が増えているなんていうことは、どうもやっぱり寝耳に水だったみたいでした。

はじめは、かんばしくない対応だったのですけれども、2回目にはがらりと状況が変わって、とにかく情報を出してくれと言われたことに応えて情報を出してきました。

クボタ内部の労働者に50人以上の死者が発生しているなど、工場の中は惨憺たる有様だという資料を出してきました。私たちはびっくり仰天しました。

クボタと初めて会ったのは、2005年のクボタショックの年の4月26日だったと思いますね。このときはですね、前日の25日に尼崎で大きな列車事故が起こってまして、クボタと会った公民館から1kmくらいのところが事故現場でした。周辺が騒然となっている中で、古川さんと私、クボタとの窓口になった飯田浩尼崎市議員（尼崎労働者安全衛生センター事務局長）の立ち会いで、土井さん、前田さん、早川さんの患者3人がクボタ側の担当者と向き合いました。



話は深刻きわまりないものでしたが、実に落ち着いたものでした。このあと、クボタ側は社内で大騒ぎになったそうです。クボタ側の対応はかなり早かったと思います。まずクボタは患者に見舞金を支払うことを決めました。その期日を取材でつかんだ毎日新聞が6月29日夕刊のトップニュースとして報じました（図7）。



図7

## 被害の実体明るみに

それからはもう、坂道を石が転がるごとくいろいろなことが起きました。例えばいろんなことがわかってきます。これがクボタ内部の被害者の数なのですが、2005年の4月26日に私たちが見せられた資料では、中皮腫は46人で、肺癌やじん肺を合わせると93人くらいいます。これもすごい数ですけれども、一つの工場で93人ですから。先ほどの胆管癌が16人でしたから、もう何倍という数です。

それが、クボタショックの後、クボタの中での被害がどんどん顕在化しまして、去年の段階で181人までいっています。大変なことだったのです。さらに大変なのが、周辺の被害者の数で、クボタショックの時にわかっていたのはせいぜい5人でしたが、去年の6月の数字では、250人までいきました。実際クボタが救済金を支払った方が235人ですので、被害としてはかなりすごいことになってます（図8）。

5人の時はかなり報道されるんですけども、250人になるとほとんど報道されないのです。すでに終わったかのように思っている方もいらっしゃるかもしれませんが、今でも毎年10人以上の方がクボタの救済金を受けているという惨憺たる有様です。

これはクボタショックの時、見舞金の支払いを受けたときに、先ほどのお三方、前田さんと土井さんと早川さんですが、残念ながら、3人とも今はもう鬼籍に入られています。



図 8

当時の初めの記者会見です。この後も3人とも運動の先頭に立って頑張っていただきました。

早川さんは「アスベスト公害の用意ドンの号砲が鳴った」と話されていました。3人とも偶然なのですが、皆さん自営業者で、自分たちが病気になることが即、生活を脅かされるという、本当に瀬戸際に立たされた人たちで、それだけに決意があったのだらうと思います。

## 想像をはるかに超えて

クボタの工場はどのようなものだったかというと、石綿水道管を造っていた工場でした。先ほども申し上げたように、猛毒の青石綿と比較的毒性の低い白石綿を半々で石綿管に入れていました。ここには出てきませんが、石綿の絶対量の使用量としては当時の日本の消費量の約1割くらいを使っていたという試算もあります。大変なことでした。(図9)

クボタショックが起こった直後から我々の運動団体の事務所にも、クボタの会社にも、それから尼崎市の市役所にも猛然と電話がかかってきて、「父が中皮腫で、尼崎で死に、クボタの近くに住んでいました」といった電話が、本当に殺到して、それをさばくのに精一杯でした。

我々のところにかけてきた人はおそらくほとんど、市にもクボタにもおかけになっていたと思います。7月の中旬の頃には、だいたいクボタの旧神崎工場の周りの中皮腫患者を30人くらいマッピングする図ができて、これはきちんと調査をしなければいけない、ということ

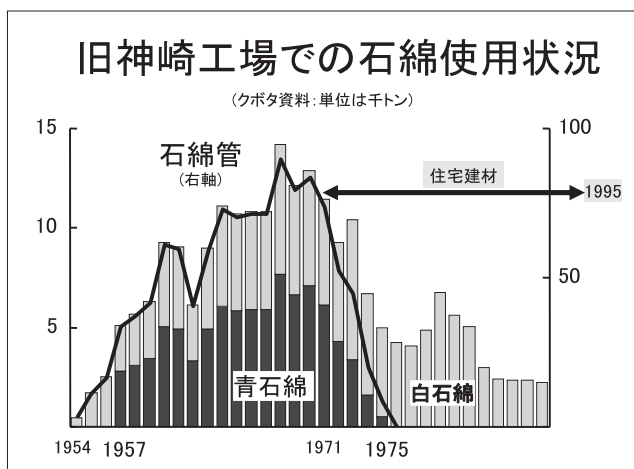


図 9

をはじめに言い出したのは車谷先生でした。

「これはいかん、1月のときの私たち（の判断）は間違っていた」ということで、7月の中旬の頃に内密に各地の安全センターの活動家を招集して尼崎で開いた会議の時に車谷さんは、これは偉かったと思いますが、疫学調査計画を持ってきて、これからやらしていただきたい、と申し出られ、車谷先生と熊谷さんの調査がはじまりました。

## 因果関係を明らかにする

私や古川さん、飯田さんたちは患者、家族との連絡などでこの調査に協力しました。

クボタの旧神崎工場を真ん中にしてだんだん患者が顕在化してくる、真ん中はクボタの工場ですけれども、周りの数字はこの地域の中皮腫の患者数です（図10）。公害事件としては典型的な様相を示していたということです。これは、近くで亡くなった方の写真ですけれども、後ろに見えるのがクボタの工場で、上のところにほぐした石綿を送風管で送って入れる「石綿箱」があったそうで、そこから飛び散っていたのではないかというのもしられました。

熊谷さんと車谷さんは、必死になって聞き取り調査を行っていました。そして、クボタの工場の周りに中皮腫の患者が集中している、距離に応じて増えているということをつきとめて、データを発表したわけです。

はじめに考えたことは、裁判になる可能性も非常に強いので因果関係の勝負だということでした。

因果関係勝負ということは、データを握った方が勝ちなので、そういうこともあって疫学調査をしていただき、途中経過をはじめに発表したのが5月28日です。この段階でデータを出すかどうかを検討して、車谷さんの判断でデータを出すということになりました。

そのときは確か半径500メートル以内で50倍くらいのSMR（標準化死亡比）だったと思い



図10

ますが、その数字を出しました。その次が、その年の勤労感謝の日に行われた大阪の日本災害医学会でした。車谷さん、熊谷さん達は、ある意味で研究者生命をかけて頑張っていたと思います。

そういう科学データを車谷さんたちが出すのと並行して、クボタとの話し合いが水面下でなされていました。そして、2005年12月にクボタの社長が被害者との会合に出席して、謝罪をするというところまでいきました。クボタの工場周辺の大気シュミレーション計算を熊谷さんが行って、これを発表したのは、クボタによる救済金制度が被害者側との話し合いの末に成立、発表される直前でした。(図11)

被害者の人たちの協力を得て、取り組んで、相応の結果も残せて、その後の運動に繋がっていくということになりました。

## 石綿被害の海外「輸出」

後は、少し私的な話を付け加えさせていただきます。

私はこういう仕事していて、クボタ事件のような事件に出会ったのは初めてでした。

クボタショックを渦中で経験したあと、これは韓国の釜山ですね。2007年の11月9日に釜山に行った時のことです。クボタショックの後、いろいろなところで石綿被害が隠されていたということがわかってきました。

特にたとえば、関西地区では、奈良県の王寺町と隣の斑鳩町に、それぞれニチアス、ニチアスの子会社竜田工業というアスベスト工場がありますが、実はその周辺で石綿公害とみられる中皮腫の患者が発生していることがわかりました。この時点までに、竜田工業周辺の被



図11 2005年12月26日 毎日新聞大阪朝刊

害者の方の問題を私たちが取り組むことになっていました。竜田工業もクボタと同じように青石綿を使用しているという事実関係も把握していました。

そんなときに釜山大学のグループが、これが中心人物のカン・ドンムクという私より若い方が、クボタの研究グループとはまったく別に、釜山市内のアスベスト工場の周辺で中皮腫が多発しているという疫学調査を行ったということが、韓国から伝わってきたのです。

それで注目して調べてみると、実は釜山の真ん中にあったアスベスト工場は1970年からニチアスが韓国の企業と合併して作った工場だったということを私たちは知るわけです。カン先生達はインターネットで熊谷さん達がクボタの調査を行ったということを知って、それを参考に調査を行って、結果を出していたのです。

ちょうど11月9日は韓国の釜山で産業衛生学会があり、ここでカン先生が石綿についてのシ



図12 2007年11月9日釜山



ンポジウムをするので、ここに行って、一度いろんな話をしようじゃないか、ということになり、そのときに学会が行われたホテルの一室でカン先生たちとミーティングをもった、そのときの写真です（図12）。竜田工業の元労働者のCT写真を持って行って、カン先生方が取り組んでいることのルーツは日本ですよ、という話をしました。

## クボタショックの張本人

このように、話が進展し、ひろがって、いろいろつながって、仕事の的には十分興味深い仕事をしていました。この後、カン先生に聞きました。「熊谷先生や車谷先生に何の連絡もなく同じように調査をやったようですが、先生は石綿問題を昔からやっていたのですか？」「いや、私は初めてです」というわけです。いろいろ聞くと、労働衛生の専門家で、これまで労働組合などと協力して様々な労働現場の調査をやってきたという方でした。そういう点は、熊谷さんたちとよく似ている方でした。

何が言いたいのかというと、日本でもそうなのですけれども、クボタの調査をやり遂げた熊谷さんも車谷さんも、いわゆるアスベストの専門家というよりも、疫学、労働衛生の専門家でフィールド調査の経験が豊富でした。韓国のこの先生も同様です。

その先生方がキーポイントを握ったと言うことが、面白いと今でも思っています。

古川さんにしても、ビールとお風呂が好きなタダの主婦だったのが、旦那さんが石綿肺ガンんで死んだためにこの世界に入ってきた人です。やっぱり専門家はダメだなあ、という話でもないのですが、クボタショックを起こしたのは、日本にも少なからずいた「著名な」「アスベストの専門家」では、決してなかったのです。

旧日本軍が掘ったアスベスト鉱山が韓国にたくさんありまして、それが放置されていてその周辺でたくさん被害が出ていることがわかって、韓国では最終的に日本と同じように石綿救済ができるきっかけとなりました。この運動を担ったのは鉱山地域を含む被害者や住民、市民団体の有志の方々でした。これはそのとき行った石綿鉱山の中の写真ですが、韓国は素早い、今では埋められて影も形もなくなりました。

## 石綿労災認定事業場名公表

最後になりますが、クボタ事件は2005年6月にはじけたわけですが、私も直接関与したアスベスト問題にとっては大きな事件がありました。

これは2007年の12月3日の毎日新聞です（図13）。

実はクボタショックの後に、日本全国がアスベストの被害がこれほど広がったということに驚愕をして、メディアも動いて、政府の方も、あろう事か、アスベストの労災を出した工場の名前を全部公表してしまったのです。

労災を出した工場の名前をほとんどすべて公表するなんていうことは、政府としては前代





図13 2007年12月3日毎日新聞大阪朝刊

未聞、あってはならないことだったはずですがそれでも、状況に恐れおののいた役人達が、「出せ!」と言われて「出します…」ということで、ワッと出したのが2005年のクボタショックの直後の7月末と8月末で、2回に分けて大量にリストが出ました。これによって、隠されてきた日本における石綿被害の顕在化を促進することになりました。

ところが、その後2年間、厚生労働省はパタッと「公表」をやめたのです。やはり元に戻そう、あまり事を大きくしてはいけないということだったのでしょうか。会社側からクレームがきたのかもしれませんが。

「私たちの方は「出せ！出せ！」と言っていたのですけれども、我々だけが言っているだけではダメで、結局出させることができなかったのですが、厚労省は、国会で質問をされたり、いろいろあって、少し出さないといけないかな、という感じに少なくなっていたときに、私が厚労省に情報公開請求をかけて、大量に資料を入手して一定の分析をしたところ、クボタショックの後の2年間でもすごい数の労災認定があるということが、企業名が全部マスキングされていた開示資料を整理しても判る、というデータを毎日新聞に持って行って「これは何とかニュースにならないですかね」と。

クボタショックのとき特報記事を書いた大島秀利さんという記者がいるんですけども、「どうだろうなあ」と。我々のいわゆる「身内」の仲間でも、「こういう風に整理したら、尼崎にこれだけ事業所があって、これわかるでしょう。すごいでしょ」とかいうと「うーん・・・」とあまり芳しくない反応でしたが、中には「これは、すごい！」と言う人もいました。

結局、毎日新聞がニュースにすると決断して、この日12月3日に、これは一面の記事ですが、けれども、本当にあんな新聞見たこと無いのですけれども、この日の朝刊は5面がすべてアスベストの記事で染まってしまった。この日を境に情勢が変わり、結局また全事業所名を公表することになって、今にいたるわけです。

これで毎日新聞は新聞協会賞を取るのですけれども。大事だなあ、と思ったのは、情報を開示するということを社会的にきちんと位置づけないと、やはり隠されるということです。このときみんなが思っていたのは、隠すとまた同じ事（クボタショック以前と）になるのではないのかということでした。これをひっくり返したのは情報公開の力を認識していた方々の努力でした。

結局、これも2001年4月に施行された情報公開法の存在が大きかったのですけれども、先ほど敗北の歴史と申しましたけれども、敗北せざるを得ない歴史のベースはですね、社会そのものが情報を公開しない、企業が企業秘密の名の下にそういう被害の状況を黙っているという事を是認するような世の中だったということが、その背景にあったということは明らかで、二度とそういう時代に帰ってはいけない、と強く感じております。胆管癌の展開にしても、20年前に起こってればああいう展開をしたのかな、というのがありますし、世の中もひょっとしたら少し変わったのかなあ、という感じがします。まとまりがありませんでしたけれども、以上で終わりにいたします。